様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２８０８

研究課題名（和文）英語における非定形節と否定辞に関する通時的研究

研究課題名（英文）A Diachronic Study of Nonfinite Clauses and Negation in English

研究代表者
田中　智之（Tanaka, Tomoyuki）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：２０２４１７３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、歴史コーパスを用いて非定形節における否定辞の分布について調査し、その歴史的発達を生成文法の理論的枠組みにおいて動詞移動と節構造に関連付けて説明した。不定詞節と分詞構文では動詞が否定辞に先行する語順が後期中英語から観察されるようになるが、この事実はこれらの非定形節において動詞がTに移動していたことを示す。一方、動名詞構文ではそのような語順は観察されない。この違いは不定詞節と分詞構文が完全なCP構造を持ち、動名詞構文が英語史を通じてCP構造を持つことがなかったことに起因すると主張した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、歴史コーパスを用いて調査を行い、これまであまり注目されてこなかった、非定形節における否定辞の分布について調査を行い、その歴史的発達の全体像を明らかにした。その中で特に有意義だったのは、後期中英語から近代英語にかけて、不定詞節と分詞構文において動詞が否定辞に先行する語順が見られるという言語事実の発掘である。また、本研究は生成文法の理論的枠組みに基づいているため、人間の脳内にある言語能力の解明を目指す生成文法のプロジェクトに資するものとなった。

研究成果の概要（英文）：　This study has investigated the distribution of negation in nonfinite clauses by employing historical corpora, and accounted for its historical development by relating it to verb movement and clause structure within the theoretical framework of generative grammar. Infinitival clauses and participial constructions began to exhibit the word order in Late Middle English where the verb precedes negation, which indicates that verb movement to T was available in these nonfinite clauses. On the other hand, such word order was not attested in gerundive constructions. It has been argued that this difference is attributed to the difference in clause structure: while infinitival clauses and participial constructions had a full-fledged CP structure, gerundive constructions has never developed a CP layer in the history of English.

研究分野：英語学

キーワード：非定形節　否定辞　動詞移動　節構造　不定詞節　分詞構文　動名詞構文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究開始当初まで、英語史における非定形節、特に不定詞節の歴史的発達を中心に研究しており、機能範疇の出現による構造変化という観点から、不定詞節に起こった様々な統語変化を説明することを試みてきた。その際、中英語から初期近代英語のデータをよく見てみると、(1) 否定辞が不定詞標識 to に先行する、(2) 否定辞が to と不定詞の間に現れる、(3) 否定辞が to と不定詞の両方に後続するという、3 通りの語順が可能であったことが観察された。(1)と(2)の語順は現代英語まで存続しているが、現代英語では許されない(3)の語順がどのように派生されていたのか、そしてなぜ現代英語までに消失したのかという疑問が生じた。

定形節に比べると、不定詞節における否定辞の分布を取り扱った通時的研究は数少なく、しかもそれらの研究では、1990 年代に編纂された小規模の電子コーパスを用いて、限られた時期しか調査されていない(Han (2000), Miyashita (2001))。しかし、その後 2000 年代に英語史の各時代を網羅する、ある程度の規模の電子コーパスが編纂されたことにより、古英語から現代英語に至る不定詞節における否定辞の分布を体系的に調査するための環境が整ってきた。

不定詞節以外の非定形節における否定辞の分布についても、通時的研究がほとんどないのが現状であった。中村 (2006)では幾つかのコーパスを用いて、分詞節と動名詞節における否定辞の分布を調査し、16 世紀から 18 世紀にかけて分詞が否定辞に先行する語順が可能であったのに対し、動名詞は当初から否定辞に後続する語順が一般的であったことが観察されている。しかし、調査対象が近代英語以降に限られており、否定辞の分布に関する分詞節と動名詞節の違い、および分詞節における否定辞の位置変化に関する理論的説明が与えられていないという状況であった。

２．研究の目的

英語の非定形節（不定詞節、分詞構文、動名詞構文）における否定辞の分布について、非定形動詞と否定辞の語順を中心に歴史コーパスを用いて調査を行い、その歴史的発達の全体像を明らかにする。そして、英語史においてそれぞれの非定形節の構造がどのように変化したのかを明らかにし、生成文法理論の枠組みにおいて、コーパスを用いた調査により明らかとなった歴史的発達に対して理論的説明を与えることを目的とする。

３．研究の方法

古英語から後期近代英語までの時代を網羅する歴史コーパスを用いて、不定詞節、分詞構文、動名詞構文における否定辞と動詞の語順を調査し、これら非定形節における否定辞の分布の歴史的変遷を明らかにする。その調査結果を非定形節の構造変化と動詞移動に関連付けて説明するために、英語史の各時代における非定形節の構造を提示する。不定詞節においては機能範疇 T と C の出現、分詞構文においては機能範疇 C の消失、動名詞構文においては CP 構造の欠如が重要となる。そして、非定形節の構造変化と動詞移動の観点から、否定辞の分布の歴史的発達を説明する。

４．研究成果

①英語の不定詞節における否定辞の分布の歴史的発達を明らかにするために、電子コーパスを用いて否定辞を伴う不定詞節のデータを収集した。まず、to 不定詞節に関しては、古英語から初期中英語において not が to に先行する語順(not-to-V 語順)のみが可能であったが、後期中英語において not が to と不定詞の間に現れる語順(to-not-V 語順)、および not が to と不定詞の両方に後続する語順(to-V-not 語順)が見られるようになり、初期近代英語において本動詞を伴う to-V-not 語順が消失したことが分かった。その結果、17 世紀半ば以降は not-to-V 語順と to-not-V 語順、および助動詞を伴う to-V-not 語順のみが許されるようになった。原形不定詞節についても調査を行ったが、後期中英語と初期近代英語において不定詞が否定辞に先行する語順が僅かに観察されるものの、基本的には英語史において否定辞の分布に関する大きな変化は見られなかった。

後期中英語から初期近代英語に見られる to-V-not 語順は動詞移動により派生されると考えられるが、それを証拠付けるために、to 不定詞節における不定詞と vP に左付加されている副詞との相対語順について調査を行った。対象となるのは副詞 never と短い目的語に先行する副詞を含む to 不定詞節であるが、否定辞の分布に関するデータと一致して、後期中英語から初期近代英語において不定詞が副詞に先行する語順の割合が高いことが分かった。また、スカンジナビア言語に見られる目的語転移に類似した現象、すなわち to-V-not 語順において代名詞目的語が否定辞に先行する語順が、この時期に少数ながら観察された。一般に目的語転移は vP 外への動詞移動を前提とするので、この事実からも to 不定詞節において動詞移動が適用されていたことが裏付けられた。

以上の調査により明らかとなった不定詞節における否定辞の分布の歴史的発達について、英語史における不定詞節の構造変化と関連付けて理論的説明を試みた。まず、古英語と初期中英語の不定詞節は前置詞としての不定詞標識 to が vP を補部に取る構造を持ち、機能範疇は存在しなかった。この構造において否定辞 not は不定詞節全体の PP に付加される構成素否定として機能し、ゆえに not-to-V 語順のみが可能であった。後期中英語になると、もともと不定詞の名詞的特性を担っていた不定詞形態素が衰退し、to が前置詞から機能範疇 T へと変化し始めるとともに、不定詞間接疑問文など機能範疇 C の出現を示す証拠が見られるようになった。不定詞節が機能範疇を伴う節構造を持つようになった結果、構成素否定であった not が NegP に生じる文否定の機能を担うようになった。この構造において、NegP が CP と TP の間に投射されることにより not-to-V 語順、TP と vP の間に投射されることにより to-not-V 語順が派生される。それに加えて、to が C に併合されることが可能であったため、TP と vP の間に投射される NegP を越えて動詞が空いている T に移動することにより to-V-not 語順が派生される。その後初期近代英語になると、不定詞節の補文標識として for が C に併合されるようになったため、to が C に併合される選択肢は消失した。また、定形節における動詞移動の衰退が不定詞節にも影響を及ぼし、T への動詞移動が消失した。これらの変化により to-V-not 語順が消失した結果、現代英語と同様に、not-to-V 語順と to-not-V 語順のみが許されるようになった。

②英語の分詞構文における否定辞の分布の歴史的変遷について、電子コーパスを用いて調査を行った。まず、否定辞を伴う分詞構文は 15 世紀に初めて出現したが、15 世紀から 18 世紀までは分詞が否定辞に後続する語順（not-V 語順）に加えて、分詞が否定辞に先行する語順（V-not 語順）も観察されることが分かった。その後、V-not 語順は 1813 年の例を最後に消失し、not-V 語順に一本化された。生成文法理論の枠組みにおいては、動詞が否定辞に先行する語順は T への動詞移動により派生されると仮定されているので、分詞構文では 19 世紀に T への動詞移動が消失したと分析される。興味深いことに、語彙的主語を伴う分詞構文、すなわち独立分詞構文では、分詞が主語と否定辞の間に現れる語順だけでなく、分詞が主語の前に現れる語順が初期英語では観察される。後者の語順は否定辞の有無に関係なく見られるため、本課題の中心テーマからは外れるが、分詞構文における動詞移動の歴史的発達を考察する上では重要となる。先行研究 (Nakagawa (2011), Visser (1966))、および電子コーパスを用いた調査から、分詞が主語の前に現れる語順は 14 世紀半ばから 17 世紀前半まで観察されることが分かった。生成文法理論の枠組みにおいては、動詞が主語に先行する語順は C への動詞移動により派生されると仮定されているので、分詞構文では 17 世紀前半に C への動詞移動が消失したことになる。

以上の調査により明らかとなった分詞構文における否定辞の分布の歴史的発達について、Haeberli and Ihsane(2016)における動詞移動の分析を援用し、分詞構文の構造変化に関連付けて説明することを試みた。まず、分詞構文における虚辞 there の生起、項前置、wh 移動に関する証拠に基づき、分詞構文は 14 世紀中ごろまでに機能範疇 C と T を伴う構造を持つようになったが、18 世紀に CP 領域を失い始め、19 世紀以降は TP のみからなる構造に一本化されたと提案した。14 世紀までは定形節において動詞第二位現象がある程度の頻度で観察されるため、分詞構文において T が値未付与の V 素性（以下、[uV]）を持つ構造に加えて、定形節との類推により、C が[uV]と EPP を持つ構造も可能であったと考えた。前者の構造からは not-V 語順、後者の構造からは独立分詞構文において動詞が主語に先行する語順が派生される。その後、15 世紀になると動詞第二位現象が衰退し始めるが、それにより C が[uV]のみを持つ構造が利用可能となり、その構造においては動詞が T まで移動する必要があるため、15 世紀に V-not 語順が出現したことが説明される。そして、17 世紀には動詞第二位現象が消失に向かうが、これは C が[uV] と EPP を持つ構造が失われたことを意味する。それに伴い C への動詞移動が不可能となり、動詞が主語に先行する独立分詞構文が消失したという事実が説明される。最後に、18 世紀中に分詞構文は CP 領域を失ったが、V-not 語順は C が[uV]を持つ構造から派生されるので、この時期に V-not 語順は消失し、not-V 語順のみが残ったのである。

③英語の動名詞構文における否定辞の分布の歴史的発達について、電子コーパスを用いて調査を行い、動名詞構文の構造に関連付けて説明することを試みた。まず、否定辞を伴う動名詞構文は初期近代英語に見られるようになったが、分詞構文とは対照的に、1 例以外はすべて動名詞が否定辞に後続する語順 （not-V 語順）であった。そして、動名詞が否定辞に先行する語順（V-not 語順）を示すその 1 例は連結詞を伴うため、not は後続する述語に付加されている構成素否定であると考えられる。したがって、動名詞構文では英語史を通じて動詞移動が不可能であると結論付けた。動名詞はもともと名詞的範疇であったが、1300 年頃に of を介することなく目的語を取るようになったという事実は、動名詞構文が 14 世紀に v を含む構造を持つようになったことを示している。そして、Visser (1966)における虚辞 there を伴う動名詞構文の初出例は 17 世紀中頃であるため、動名詞構文はこの時期に TP 構造を持つようになったと考えられる。一方、分詞構文とは異なり、項前置や wh 移動、および語彙的主語に動名詞が先行する語順など、CP 領域の存在を示す証拠は動名詞構文には見られない。14 世紀から 17 世紀中頃までの動名詞構文は vP までしか持たなかったので、そこに生じる否定辞は v′または vP に付加される構成素否定であり、not-V 語順のみが 可能であった。動名詞構文は 17 世紀中頃に TP 構造を持つようになったが、T への動詞移動は C の[uV]により駆動されるため、CP 領域を持たない動名詞構文では V-not

語順は派生されず、英語史を通じて not-V 語順のみが可能であることが説明される。

（引用文献）

Haeberli, Eric and Tabea Ihsane (2016) “Revisiting the Loss of Verb Movement in the History of English,” *Natural Language and Linguistic Theory* 34, 497-542.

Han, Chung-hye (2000) “The Evolution of *Do*-Support in English Imperatives,” *Diachronic Syntax: Models and Mechanisms*, ed. by Susan Pintzuk, George Tsoulas, and Anthony Warner, 275-295, Oxford University Press, Oxford.

Miyashita, Harumasa (2001) “Infinitival Verb Movement in Middle English and Early Modern English,” *JELS* 18, 131-140.

Nakagawa, Satoshi (2011) “Synchronic and Diachronic Aspects of Nominative and Accusative Absolutes in English,” *Gengo Kenkyu* 139, 85-109.

中村不二夫 (2006)「Not 後置型-ing 形の衰退―助動詞 do の発達の隠れた側面(1) 16-20 世紀日記・書簡資料を根拠に」『愛知県立大学文学部論集（英米学科編）』55, 41-86.

Visser, Frederikus (1963-73) *An Historical Syntax of the English Language* (4 vols), E.J. Brill, Leiden.

（使用コーパス）

Collins Wordbanks Online

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Ariel Diertani (2016) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English*, Second Edition (PPCMBE2), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Smet, Hendrik (2005) *The Corpus of Late Modern English Texts* (CLMET), University of Leuven, Belgium.

Taylor, Ann, Arja Nurmi, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Terttu Nevalainen (2006) *The York-Helsinki Parsed Corpus of Early English Correspondence* (PCEEC), University of York, York.

Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 田中智之	４．巻 14
２．論文標題 英語史における機能範疇Pred(ication)の出現	５．発行年 2022年
３．雑誌名 英文學研究　支部統合号	６．最初と最後の頁 91-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中智之	４．巻 なし
２．論文標題 多重主語構文タイプの受動虚辞構文の歴史的発達	５．発行年 2022年
３．雑誌名 言語の本質を共時的・通時的に探る：大室剛志教授退職記念論文集	６．最初と最後の頁 223-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中智之	４．巻 なし
２．論文標題 英語史における動詞移動と分詞構文の構造変化	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ことばの様相：現在と未来をつなぐ	６．最初と最後の頁 52-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中智之	４．巻 4
２．論文標題 非定形節における動詞移動の歴史的発達	５．発行年 2021年
３．雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	６．最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中智之	4．巻 2
2．論文標題 多重話題化と英語史における機能範疇の消失	5．発行年 2019年
3．雑誌名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論	6．最初と最後の頁 38-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoyuki Tanaka	4．巻 38
2．論文標題 The Loss of Verb Movement in Participial Constructions	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Linguistics and Philology	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoyuki Tanaka	4．巻 1
2．論文標題 The Origin and Development of Negation in Infinitival Clauses	5．発行年 2018年
3．雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6．最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 田中智之
2．発表標題 英語史における多重主語構文の出現と消失
3．学会等名 「言語変化・変異研究ユニット」第7回ワークショップ
4．発表年 2021年

１．発表者名 田中智之
２．発表標題 受動虚辞構文における主語位置の変化
３．学会等名 「言語変化・変異研究ユニット」第6回ワークショップ
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中智之
２．発表標題 英語史における機能範疇の出現と消失
３．学会等名 日本英文学会第89回大会シンポジア
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関